

メディア論の生成と人工補完

—— メディア変容の現象学に向けて

張江洋直

●要約

本稿では、メディア論の生成あるいは1980年代中葉以降に生じた〈マクルーハン・ルネッサンス〉という思想的な出来事そのものの理論地平を主題とする。周知のように、M. マクルーハンの一連のメディア論が上梓されるのは1960年代である。だが、それはマスメディア論においては強い影響力を示すものの、マクルーハン自身が自ら呈示したメディア論としてはあまりにも脆弱にしか受容されなかったといえるだろう。本稿では、この謎を、一方では、現代社会論の変遷から明らかにするとともに、他方では—— むろん、こちらがより重要ではあるが、当時のコミュニケーション研究における中心的モデルとされたシャノン・モデルの狭隘性から解明する。そのうえで、〈マクルーハン・ルネッサンス〉から現在的に継承すべき論点を、人間的な諸力の外化として捉えるマクルーハンの「環境」概念の動態的な理解に求め、さらにそれをA.R. ストーンに倣い「人工補完 (prosthetic / prosthesis)」と述語化する。そこにおいて、私たちが、じつは社会諸現象の存在論的な〈錯乱〉という決定的な事態に直面していることを明らかにするとともに、現在的に問われるべきは人工補完を内在化した新たな《生きられた脱構築の可能性の模索》であることを呈示したい。

●キーワード

メディア論
現代社会論
コミュニケーション
シャノン・モデル
サイバネティクス
人工補完
技術決定論
存在論
M. マクルーハン
A.R. ストーン

はじめに

本稿では、メディア論の生成あるいは1980年代中葉以降に生じた〈マクルーハン・ルネッサンス〉の成立自体を主題とする。周知のように、1960年代初頭にM.マクルーハンによる一連のメディア論 [McLuhan 1962=1986; 1964=1987] が上梓される。だが、その受容はあまりにも時代性に制約された跋行的なものであったろう。つまり、マクルーハンのメディア論は、1960年代においてマスメディア論としてはたしかに強い影響力を示したものの、それは字義どおりの意味におけるメディア論としての受容とはいえないものであったろう。これを謎とってよいのだろうか。あるいは、それは時代的な必然性をもった出来事といえるのだろうか。いずれにせよ、本稿では、〈マクルーハン・ルネッサンス〉を可能とする議論地平の生成を問題とし、そこから現在の私たちが継承すべき論点を明らかにしたい。前者の指標は2点、その第1は「現代社会論」の制度化の地平に、第2はコミュニケーションの偏在性あるいは前景化という事態にみるることができる。とりわけ後者に関しては、A.R.ストーンが語る「人工補完 (prosthetic / prosthesis)」との関連の内に存在論的な問題地平を含むものとして、新たな《生きられた脱構築の模索》の可能性として示したいとおもう (1)。

1. コミュニケーションの前景化——〈マクルーハン・ルネッサンス〉の下図

1-1. 現代社会論の確定——2項図式から3項図式へ

周知のように、社会学には「現代社会論 (theories on modern society)」という独立した1つの研究領域がある。これは現在のには自明な事柄にみえるだろう。しかし、現代社会の時代的な指標をどこに求めるかでその内実は決定的に異なるだろう (2)、概していえば社会学の古典群であるA.コントやK.マルクス、あるいはかれらの次世代といえるM.ヴェーバーやE.デュルケムにしても、かれらがそれぞれに直面した(当時の)〈現代社会〉を研究対象としたという意味では、そもそも社会学や社会理論は必然的に何らかの意味で〈現代社会論〉であるともいえるだろう (3)。だが、ここでは現在の制度化された通常の範囲内で現代社会論を捉えておきたい (4)。

なお、これから現代社会論の生成を図式的な仕方では鳥瞰することで、本稿で問題とすべき論点があるのかを整理しておきたい。ちなみに、本稿では、わが国で現代社会論という研究領域の制度化が現実化された時期を1970年代中頃にみている。つまり、それは1950年代中葉からはじまり1973年の第1次オイル・ショックをもって収束する高度経済成長期という深く決定的な社会変動期を経た後のことである (5)。

さて、私たちがみる限り現代社会論の社会学における制度化は、この学科でひろく用いられる歴史図式の転換に結果的によく現れているとおもえる。周知のように、概して初期社会学の歴史理解は、「前近代→近代」という単純な2項図式に定式化できる。そこでは近代社会は「産業 (industry)」を中心に構想され、その批判もまた同じ機軸から描かれている。周知のように、コントとマルクスはその典型といえるが、いずれにせよ19世紀から20世紀中葉までの社会学理論や社会理論の揺籃はつねに「産業」から離脱することはなかったと概観できるだろう (6)。

むろん、こうした確言にはすぐさま異論や反論が生じるかもしれない。というのも、「大衆社会 (mass society)」をめぐる諸言説の史的登場は初期近代との決定的な画期を想定ないしは表象するものとして捉えうるからである [張江・佐野 1997]。だが、この指摘が意味をもつのは、ここで呈示する歴史と

解の図式化に関わる異論の論拠というよりは、むしろ社会学の歴史理解における〈過渡期〉の存在を証左するものではあるまいか。というのも、「大衆社会論」の論議が終焉するとともに現代社会論という言説空間はある決定的な変容を示すからである。

じっさい1970年代以降において、たとえ使用される名辞が異なる場合があるにせよ、概して社会学の基本的な歴史理解は「前近代→近代→現代(後期近代)」といった3項図式へと転換する(7)。ちなみに、ここでいう〈過渡期〉の特徴は、社会編成に関わる原理の並立という論理構成によく現れている。この点を確認するために、じっさいにこの名辞を最初に用いたK.マンハイムの言説を確認しよう。かれは、「産業社会」の歴史的な展開過程に明確な合理性を認めつつ、同時に、大衆社会を近代とは明らかに異なる「現代社会」として〈発見〉している。

近代社会は、大規模な産業的社会としては、すべての衝動の充足を断念し抑圧することによって、その行為組織を最高度に予測しうるものとするが、他面大衆社会としては、無定形の人間集合に特徴的なあらゆる非合理性や激情的暴動をも産む。[Mannheim 1940=1962:73]

わが国における大衆社会論は、一方では「戦争責任」の問題系にも関わりながらフランクフルト学派、とくにE.フロムの『自由からの逃走』[Fromm 1942=1951]に強く影響を受けつつも、他方ではD.リースマンの『孤独な群集』[Rieseman 1950=1964]の導入・受容とも深く関連して、高度経済成長期へと向かう1950年代から積極的に展開される。ちなみに、この著作の邦訳出版は1964年である。

周知のように、こうした大衆社会論の系譜、とくに後者はそのまま消費社会論へと連なる。ひろく知られているように、この性向は概して《生産から消費へ》という標語をもって語られてきた。その代表的作品は〈記号の消費〉を論じたJ.ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』[Baudrillard 1970=1979]であろう。この邦訳出版は1979年であり、ボードリヤールが多くの関心を集めたのは1970年代中葉以降から1980年代という、日本社会がポスト高度経済成長期において高度消費社会へと邁進する時期においてである。

他方、これに先立つ時期にわが国にあっても、研究者に限らずより多くの人々の耳目を集めたのがD.ベルの「脱産業社会(post-industrial society)」論である[Bell 1973=1975]。ベルの議論は、1960年代を通じて先進社会が財の生産からサービスへとその経済的な中心を移行させ、産業社会=近代社会から情報や知識・サービスに社会的力点を置く脱産業社会へと離陸しようとしているというものである。ベル自身が「information society(情報社会)」という和製英語を用いるのは1980年代以降のことではあるが、かれの議論は情報社会論の基本的な地平を拓く先駆であるとともに、そのもっとも重要なものの1つだといってよいだろう[張江 2003]。

ここで注視したいのは、ボードリヤールやベルが明らかに「産業化」に代えて新たな社会編成原理を呈示することにある[大谷 2007]。つまり、ここに現代社会論が「大衆社会論」とは決定的に異なる仕方で、明確に1つの研究領域として確定したとみることができるだろう。この点を比喩的に語れば、ボードリヤールやベルの諸著作を端緒とする社会理論の新たな動向とは、少なくとも大衆社会論にみられた〈二重権力状況〉に終止符が打たれ、さらに産業化に代替される新たな単一の原理への模索が開始されたものとみることができる。

1-2. コミュニケーションの前景化——生産からコミュニケーションへ

しかし、私たちがここで捉えたいのは、こうした現代社会論の制度化過程の問題それ自体ではなく、ボードリヤールやベルの議論地平が共通に〈コミュニケーションの前景化〉に関わる点である。周知のように前者では〈モノの記号化〉が焦点化されているので、私たちの主張は首肯し易いだろう。だが、この論点はそこに限られるわけではない。たとえば、リースマンの「他人指向型パーソナリティ」をたんなる「消費」の問題系としてみるだけでなく、現在の的には、むしろ「多元的な自己像」という議論地平を拓くものとしてより積極的に評価すべきであろう〔浅野 2007〕。そうであれば、そこからは、「機械の時代の終焉 (the close of the mechanical age)」において問われる「多重人格」の問題系〔Stone, 1995=1999〕もそう遠くはないはずである (8)。この論点で関連づけるならば、リースマンの議論もまた〈コミュニケーションの前景化〉の議論地平を準備した書著作の1つとして明確に位置づけることが可能であろう。

また後者の場合は、M. ポスターがすでに適切な批判を行っている問題系に関わっている〔Poster 1990=2001 : 48〕。ポスターのベルへの批判の中心は、ベルの言説にあっては情報が言語的事実としてではなく経済的事実として扱われているとする論点に収斂させることができる。たしかに、この批判点は正鵠を射ている。しかし、ベルの議論もまた、こうした不充足さは認められるにせよ——逆から述べれば、こうした批判を招来させるという意味において、情報を「言語的事実」とする一歩手前、つまり、その理論地平を準備するものという意味で、やはり〈コミュニケーションの前景化〉の議論地平を決定的に拓くものとして把握できるだろう。

ところで、ここでいう〈コミュニケーションの前景化〉とは、たんにコミュニケーション過程そのものが大衆的な関心の中心となり前景化する事態を指すだけではない。それを、たとえば A. ギデンズの「再帰的自己」〔Giddens, 1991=2005〕の議論を手がかりにして考えてみよう。とはいえ、ギデンズの議論を知る人びとからみれば、かれの理路にあって〈コミュニケーションの前景化〉はあまり顕在的ではないとみえるかもしれない。というのも、自己論を機軸にそれらを整理し直してみれば、さきにみたリースマンの自己論が自己の対他関係を焦点化するのに対して、ギデンズの自己論は自己の対自関係に焦点を当て再構成されたものとすることができるからである〔浅野 2007〕。

しかし、ギデンズがいう再帰的に創出される自己がまさにそのように創出される機制の大前提となるのは、何らかの社会的なコミュニケーション過程そのものの作動であり、情報化された社会機構そのものの作動である。むしろギデンズ的な自己の創出機制は、単純な情報化というよりは、「脱埋め込み disembedding」〔*ibid.*:19-25〕^{メカニズム} 機制と呼ぶべきものだが、たどえそうであるにせよ、この性向もやはり〈コミュニケーションの前景化〉を欠いては成立不能であるのもまた確かなことだろう。

さて、以上の諸点を鳥瞰的に述べておけば、通常よく語られる《生産から消費へ》の歴史的な流れで論点を整理する以上に、むしろ《生産からコミュニケーションへ》の転換が現代社会論の制度化の中軸に置かれていると考えるほうがより妥当性があるようにおもえる。

ところで、こうした現代社会論あるいはよりひろく今日的な社会理論における〈コミュニケーションの前景化〉の地平をそもそも拓いたのは N. ウィーナーのサイバネティクス (cybernetics) である。この点を明らかにするために、ウィーナーの翻訳者の一人でもある鎮目泰夫の解説を確認しておきたい。

communication という語も、……人と人が何かを共に分け合うことを意味し、人と人、町と町との間の通信、交通、交易や、病気がうつることを指す……。……おそらくはウィーナーの著書『サイバネティクス——動物と機械における control と communication』が最大の転機になって、この英語は、人間間には限らない意味での情報 (information) の伝達を指す言葉としても国際的に使われるようになってきた。〔鎮目 1983: 159-160〕

サイバネティクスが提起したコミュニケーションと制御 (control) とを一体とするシステム論的な方向はベルにも明確に受け継がれている。だが、その後の情報社会論も含めてウィーナーの名前はさほど問題とされず、じっさい1980年代中葉にみられる《マクルーハン・ルネッサンス》が生じるまで、多くのコミュニケーション理論を一貫して支えるのはシャノン・モデルである。それゆえ、次に、この微妙なねじれについて確認しておかなければならないだろう。

だが、このテーマを把握するために少しの迂路を採ることにしよう。ウィーナーは1954年の『人間機械論 (The Human Use of Human Beings)』第2版でシャノン・モデルの提唱者である C.E. シャノンと W. ウィーヴァーの名を挙げて、次のようにいう。

私は、すでに、『サイバネティクス』と題する多少とも学術的な著書を書き、それは一九四八年に出版された。その思想を一般大衆にわかるようにしてくれというかなり強い要望に答えて、私は『人間の人間的な利用』の第一版を一九五〇年に出版した。それ以来、この問題は、クロード・シャノン博士とウォレン・ウィーヴィー博士と私自身との共有するいくつかの観念から、一つの確立された研究分野へと成長した。〔Wiener, 1954 = 1979: 9〕

情報のフィードバックによる自動制御というシステム論を基本にした「一つの確立された研究分野」は、後に情報科学 (information studies / informatics) としてかたちを成すだけでなく、周知のように、ロボット工学や認知心理学、神経学、経済学、そして社会学など等、今日の多くの科学分野に影響を与えている。鎮目はウィーナーとシャノンとを関連づけて、両者の理論的要点を次のように語っている。

シャノンの情報理論は、雑音のある通信路を使って情報をいかに能率的かつ正確に (誤差なしに) 送るかという問題の基礎を築いたが、ウィーナーの予測理論は、一面ではそれを裏返したみたいなもので、雑音のまざった信号の中から情報の現在の値や未来の値をいかにして推測するかという問題に関するものである。〔鎮目 1983: 36〕

いずれにせよ、ここで名前が挙げられたウィーナーとシャノン、ウィーヴァー、そしてマクルーハンは、その後のコミュニケーション研究さらにメディア論の画期をかたちづくっているだけでなく、社会理論における〈コミュニケーションの前景化〉という性向の理論地平をも形成しているといえる。ちなみに、シャノン・モデルとマクルーハンのメディア論という2つの決定的な出来事は共に1960年代初頭に生じている。これから、それらを順次みることにしたい。

2. メディア論生成の前夜——シャノンからマクルーハンへ

2-1. シャノン・モデルの狭隘性——主意的行為者とコミュニケーション

シャノン・モデルとは、シャノンとウィーヴァーによって提唱されたコミュニケーション過程の数理モデルである。それは、「情報源・送信機・メッセージ・通信路・受信機・受信地」の6つの構成要素からなる〔Shannon and Weaver 1964=1969:46〕。これらの構成要素は過不足なく配置され、しかも全体は簡素で単純でもある。つまり、それはモデルとしての要請を十分に満たしているといつてよい。じつさい、このモデルは1960年代から1970年代中葉あたりまで、「おそらく、もっとも影響力のあるコミュニケーション・モデル」〔McQuail 1975=1979:22〕とみなされてきたのである。

だが、そこに決定的な2つの陥穽がある。第1は通信路=メディア観の問題系だが、それはマクルーハンとの関連で後論に委ね、ここでは第2の問題点である、その狭隘性について確認したい。

シャノン・モデルの狭隘性は、コミュニケーション過程を行為論的に捉えるときに明確になる。それゆえ、この問題点は、このモデルが固有にもつ欠陥とまではいいえないとみえるかもしれない。なぜならば、それは、このモデルを使用する側の問題でもあるといいうるからである。とはいえ、たとえばそうであると仮定しても、少なくとも使用者に第2の問題点を誘発させる主因は、やはりこのモデル自体にあることはあえて確言しておかなければならないだろう。

というのも、D.マクウェールが指摘するように、この「数学的理論とは、人間でも、機械や別のシステムでも、どのような情報伝達の状況にも適用できる性質のもの」〔*ibid.*,22-23〕とされるからである。むろん、これは「情報科学」の基本思想である。

さて、シャノン・モデルの狭隘性を明らかにするために、ヴェーバーによる行為類型論を手がかりにしよう。周知のように、それらは「目的合理的行為」「価値合理的行為」「感情的、特にエモーショナルな行為」「伝統的行為」という4つの理念型である〔Weber, 1922=1972:39〕。

ここで、これら4類型のなかで注視したいのは「目的合理的行為」である。この理念型にとって、行為それ自体は「手段」であるに過ぎない。そこでは如何に合理的に、つまり効率よく目的を達成させられるかが問題である。そのために、この理念的な行為者は「目的、手段、付随的結果に従って自分の行為の方向を定め、目的と手段、付随的結果と目的、更に諸目的相互まで合理的に比較秤量」〔*ibid.*,41〕することになる。つまり、この理念型は主意的な(voluntary)行為者モデルである。

この理念型のどこが問題とつながるのだろうか。じつは、シャノン・モデルは行為論的視角からみる限り、この「目的合理的行為」にしか妥当しない。これが狭隘性の内実である。

まず留意すべきは、シャノン・モデルがもつ前提事項である。竹内郁郎によれば、シャノン・モデルははじめから工学的コミュニケーションを念頭に置いている。そのために、シャノン・モデルでは、暗黙裡に「送信機」および「受信機」のはたらきを、すでに言葉や文字や絵などのかたちで記号化されているメッセージを電流や電磁波の信号に変換すること(および信号をメッセージ記号に復元すること)に限定している〔竹内 1973:107〕。それゆえ、そこでは「送信機」にとってメッセージは所与のもの」〔*ibid.*〕とされる。こうした前提は、さきに鎮目の解説にみたように、シャノン・モデルにとっては「雑音のある通信路を使って情報をいかに能率的かつ正確に(誤差なしに)送るか」に関心が焦点化されている以上、当然のことといつてよいだろう。

たしかに、こうした関心が拓く領域内にあっては「メッセージ」は所与とされてしかるべきである

し、「記号化されているメッセージ」も様態としてはやはり所与であろう。さらにいえば、そこで想定されているコミュニケーション過程がこの〈記号化された所与のメッセージ〉を「受信地」に「能率的かつ正確に」送り届けるという目的を前提とする、つまり、この目的に基づいて構成されることも妥当なものだといえるだろう。

しかし、こうした妥当性はすべてシャノン・モデルが成立する関心の範囲内においてに過ぎない。つまり、このモデルの妥当性はあくまでもこの関心の範囲内に限定されなければならない、それをあたかも「人間でも、機械や別のシステムでも、どのような情報伝達の状況にも適用できる性質のもの」といった主張は、あえていえば誇大宣伝とさえいいうるだろう。

なぜこうした事態を招来してしまうのかといえば、このモデルの考案者たちが自らの前提を暗黙裡にしたまま出立し、その吟味を完全に不問に附しているからである。換言すれば、シャノン・モデルは《すでに記号化されているメッセージを所与として、それを能率的かつ正確に受信地に送信する》場合にのみ妥当するのであって、それ以外の行為類型のモデルとしては成立不能であろう。

では、このモデルを社会的コミュニケーション分析において使用する場合はどうだろうか。たとえば、さきにみた竹内は幾つかの修正案を吟味しつつ、独自の修正モデルを呈示する。それは「送信機」と「受信機」および「通信路」＝メディアに修正を施し、それぞれを「記号化」「記号読解」「チャンネル」へと変換するものである〔竹内 1973:107〕。これによってコミュニケーション過程は「発信体」「記号化(体)」「メッセージ」「チャンネル」「受信体」「記号読解体」〔竹内 *ibid.*, 106 ; 1997 : 4〕の6つの要素から構成されることになる。

私たちがみる限り、この変形の要諦は一貫して行為主体の選択に関わる問題系に収斂している。つまり、それは最終的には《人間的な自由》をより確保するための修正であり、むしろ、その方向は妥当なものだろう。だが、そこでは結局のところ《自由》は《意志》へと変換されるに過ぎない。つまり、こうして竹内による修正シャノン・モデルもまた同様に、主意的で狭隘なコミュニケーション類型という陥穽へと入り込んでしまう。

さらに、こうした問題点をより本質的にいえば、こうした了解を可能とする、あるいはそのように強いる当のものとは、数理モデルを、それが暗黙裡に有する〈前提条件〉を吟味することなしに、無限定的にコミュニケーション過程の一般モデルとする了解を可能とさせる〈科学主義的な認識空間〉そのものであり、さらに、それがそもそもポリティカルに作動すること自体への等閑視であろう。それを端的に言えば、自然科学と社会科学との〈棲み分けの心性〉とってよいようにおもう(9)。

だが、いずれにせよここでは、シャノン・モデルがコミュニケーション研究の安定した基準値として君臨した事態を分析するには、関心がそれに相関する領域——その認識の〈対象領域〉が物質的であれ観念的であれ、それらがいずれも関心に相関する「限定的な意味領域 (*finite provinces of meaning*)」〔Schutz,1962=1985 : 38〕と対応するという現象学的な志向性分析の基本枠組みが必須であることを指摘するに留め、次の吟味すべき論点へと理路をすすめたいとおもう(10)。

2-2. マクルーハン・ルネッサンスの意義——メディア論の生成と技術決定論のあいだ

1960年代にマスメディアに登場するマクルーハンは、まさに時代の寵児であり、その影響力は研究者集団の域を超えた1つの社会現象と呼びうるものだろう。それが、1970年代への推移とともに「死

んだ犬」のごとき扱いを受け、1980年代中葉以降の《マクルーハン・ルネッサンス》が生じるまで、かれは現代社会論の視界から完全に消失する。

じつは、かれが〈再発見〉されるまでの期間とは、電子メディアという新しい技術に誘発された「官庁や財界、メディア業界のポリティカルな力学のなかから噴出し、研究者もまたその議論のステージに便乗することでとりざたされた」〔水越 1993：58〕ニュー・メディア論の時代である。そこにおいて、「電子的な情報通信技術の高度化と社会の関係をめぐる議論……の焦点は……新しい電子情報通信メディアが社会にもたらすであろう新たな便益をめぐる未来像の構築に据えられていた」〔若林 1993：46〕。つまり、《マクルーハン・ルネッサンス》とは、こうした新技術に触発された未来学的視角から脱し、メディア論的視角が生成する思想的な物語の象徴的な出来事なのである。

さて、こうしたマクルーハンの〈認識－言説空間〉における落差に関してはすでに別稿で少し論じてあるが〔張江 2003：2004〕、ここではさらに、その主因を、相互に関連する3つの指標に即して分析しておきたい。それらの第1を「時代性」、第2を「コミュニケーション研究が有する暗黙の人間像」、そして第3を「メディア論という問題系」と呼んでおきたいとおもう。

第1は比較的単純な論点である。ここでいう時代性とは1960年代～1970年代初頭までを指す。この落差の主因は、テレビや電話といった電気メディアの大衆的な普及によって、マクルーハンの過剰ともいえる楽観主義が大衆的な信憑性構造 (plausibility structure) と決定的な齟齬を来したことにあろう。また、この時期の電子メディアの可能性は大衆的な準位では未だ皆無とあってよく、コンピュータ・コミュニケーションはアメリカ西部のサブ・カルチャーないしはカウンター・カルチャーの域を一步もでるものではなかった〔11〕。

第2は、さきにみたシャノン・モデルが暗黙裡に主意的人間像を前提にしていることに端的に現れている。これは、当時のコミュニケーション研究の圧倒的な中心がマスメディア研究であったこととも関連する。マスメディア研究であれば、送信者にすでに一定の意図が存すること自体は自明な所与的な事柄である。それゆえ問題は「受信者」に焦点化されるわけだが、ここで指南力を発揮するのは大衆社会論的な視角——《主意的人間像からの凋落態としての大衆》という論点であって、決してメディア論のものではない。しかも、それだけではなく、そこでは「メディア」がマスメディアの記号論的な有徴として機能していたのであって、そのバイアスが解かれるには、若林幹夫が逆転した表現で定式化するように、《ニュー・メディア論からメディア論へ》という知的視角の決定的な転換を必要としたのである〔若林 1993：46〕。

ちなみに、こうした主意的人間像をモデルとする限り、メディアはたんなる「通信路」として安定的に、つまり何ら分析の対象となることもなく所与として措定されるか、あるいはより実質的に主体の選択の問題を含意する「チャンネル (channel)」へと名称変更を施されるしかないだろう。しかし、すえにみたように、後者もまた、その内実はたんなる「通信路」であることに変わりはない。

第3の内実は、マクルーハンが語った「メディアはメッセージである」〔McLuhan 1964=1987：14〕という著名な命題に象徴させることができる。ここでは、メディアは情報のたんなる「通信路」ではない。つまり、この命題は、「メディアそのものが、それが運ぶメッセージとは独立にもっている……人間の経験と関係を構造化する力を言い表したもの」〔浜 1996：98〕と捉えうるだろう。換言すれば、マクルーハン理論にはたんにメディアという経験の領域を問うだけでなく、さらに人間的な諸経験の可能性

の条件として〈メディア性〉を問う理論的な方向性をみることができる〔張江 1999〕。

だが、それは端緒としての方向性であるに過ぎない。この点を簡略に確認しよう。

マクルーハンが語るメディアとは「われわれ自身の拡張したもののこと」であり、それは「新しい技術」〔McLuhan 1964=1987: 7〕を意味する。「衣服は皮膚の拡張であり」〔*ibid.*: 120〕、「機械化」とは「人間の外なる自然あるいは人間の内なる本性を、増幅させ特殊化した形式に移し変えたものに他ならない」〔*ibid.*: 59〕。簡略に言えば、かれの「メディア論は、メディアの技術的な変化がそのまま人間自体を変化させるという発想」であり、「道具が手の延長であるように、活字メディアも電子メディアも、人間の延長だという」〔小阪 2000: 31〕ことになる。

次に、この第3の論点を主題的に吟味することにしよう。

3. 人工補完とメディア変容 —— メディア論から人工補完の存在論へ

3-1. メディアから人工補完へ —— 「人間拡張」の論理

かつて私たちはマクルーハンによる、このアナロジーに依存した短絡的な思考を「そこで問うべき課題を暗喩的修辭法で飛び越えてしまうことで、結局は技術決定論の域を一步もでてはいない」〔張江 2003: 14〕と論定した。この確定は妥当なものだが、さらに、問うべき問題系はより深刻な相貌を呈していると附言しなければならないだろう。というのも、マクルーハンによって駆使される跳躍する修辭法によってもたらされる技術決定論的な内実をこそ、現在の問わなければならないからである。

この論点を吟味するために、ここでA.R. ストーンが呈示する「人工補完 (prosthetic / prosthesis)」〔Stone, 1995=1999〕について確認しておきたい。この用語は、元来は医療の一分野である「補綴学 (prothetics)」で義歯や義足……など等の人工物で身体的な機能を補完すること、およびその用具を指す。それゆえ、「われわれ自身の拡張したもののこと」を指すマクルーハンのメディア観はそのまま人工補完と全的に重複する。かれのメディア論において、衣服、車輪、自転車、自動車といった謂わゆる生活に関わる諸アイテムが、一般にはメディアとされる、たとえば印刷、新聞、電信、電話、ラジオ、テレビ……など等とまったくの同一地平に措定されていることから、私たちの、この用語置換はすぐれてマクルーハンの的であるといえるだろう。

さて、ここで吟味すべきは、マクルーハンの跳躍するアナロジーがこの人工補完と身体とを全的に同値することである。この論点の何が問題であり、あるいは、どこに妥当性があるのだろうか。この点を次に考えてみたい。

たとえば、私たちが盲人の杖が地面の微細な凹凸を感受するのを知るとき、たしかに、そこに身体の拡張をみることができる。そこにあつて杖という人工補完は身体化されている。むろん、これは典型例であつて、特殊事例ではない。じっさい、このような、しかも多種多様な人工補完が私たちの日常生活には重層的に存立し、そのどれもが個々人によって身体化され、謂わば生き生きと作動している。否、より適切には、それらは個々人によって〈生きられている〉。たとえば、義歯、眼鏡、コンタクトレンズ、むろんそこには、マクルーハンがメディアとして列挙した、衣服、車輪、自転車、自動車……など等も含めることができる。だが、それだけか。むしろ私たちの日常生活とは、こうした重層的な人工補完の諸連関なしには成立し得ないというべきだろう。かつてはたんなる夢想であつたウェアラブルコンピュータや移動体通信 (携帯電話)、インターネット……など等、そのどれもが「小型

化」という名辞で身体化を志向され、それらは次々に実現され普及している。

こうした現況を目の当たりにしたとき、たとえば身体的本性＝自然性を措定しておいて、それを墨守すべきだと主張するロマンティックな夢想はすでに思想的な遺物以下のものでしかないだろう。だが、たとえそうであるにせよ、人工補完が個々人の身体と全的に同値されてよいはずがない。もしもそのように同定されるならば、それは明らかな誤謬である。そうであれば、ここで、何が問われなければならないのだろうか。

マクルーハンのメディア論は、諸技術を徹底して〈人間的な諸経験との相関〉の内に捉えようとする。この視点はいまなお、その重要性を失ってはいない〔張江 2003〕。だが、問題は、そこで語られる時間軸の準位が如何なるものであるか、この点にある。

それを端的にいつてしまえば、ここで問われているのは《類と個》という古い19世紀的な問題系である。つまり、マクルーハンの言説は、《類的な時間》と《個体的な時間》との異同を不問に附しているといつてよい。換言すれば、そうであるが故に、マクルーハンは安易にメディアと身体とを同値できるのである。では、大きく設定すれば2種に表象化される、こうした《類と個》という時間性は具体的に如何なる相で捉えればもっとも妥当な把握といえるだろうか。

ここではそれを主題的に語る紙幅はないが、それをどのように思索するか、その方向性だけは示唆しておきたい。まずは、諸個人が生きる現在を W. ベンヤミンがいう《歴史的現在》として把握することが出立点であろう〔12〕。かれは遺稿である「歴史の概念について」において、「歴史は構成の対象であつて、この構成の場を成すのは均質で空虚な時間ではなく、現在時 (Jetztzeit) である」〔Benjamin 1992 : 150 = 1995 : 659〕と指摘する。ベンヤミンのいう「現在時」とは、むろん空間的に表象されたバラバラな瞬間あるいはその連鎖を意味しない。それは厚みを持ち、膨らみのある〈いま〉であり、個々人によって〈生きられる・いま〉である。この了解を出立点として、次の2点を徹底して関連づけて自らの理路を歩むのでなければならないだろう。その第1は《類と個》という表象軸そのものが相互主観的な構成過程における理念化の産物であることを見据え、しかし、第2に《類的な時間性》をたんなる理念的な〈抽象態〉とするのではなく、それが私たちの日常生活の世界において多層的な人工補完の意味層の〈沈殿 (sedimentation)〉として存立することを十全に捉えることである。このときに、人工補完の身体化あるいはそれが〈生きられる〉という動的な把握が理論的な分水嶺ともいふべき決定的な鍵になるはずである。

3-2. 人工補完と存在論的〈錯乱〉

最後に、現在的に問題とすべき論点を明記して本稿を終えたいとおもう。《マクルーハン・ルネッサンス》の意義を継承するとは、つまり、少なくともマクルーハン理論から現在的に把握すべき、思索に足る論点とは、かれの無邪気なアナロジーを私たちの現況と心性とに対比させ、自らが生きる〈融合〉を明確に把握することにある。それは、人工補完と身体との〈融合〉を、一方では必然として積極的に認めつつ、同時に他方で、この融合関係をいわば〈脱構築〉することの個別具体的な模索でもあろう。ここでは、例示として〈臓器移植問題〉を挙げておきたい〔張江 2000 b〕。

ここで〈臓器移植問題〉の何が問われなければならないのだろうか。ここでは、この問題系を人工補完との関連から捉えるために、「ドナー (donor)」に焦点化してみることにしよう。

さて、ドナーとは何か。じつは、このように問うたとき、すでに私たちが歩むべき問いは〈そこに〉浮上している。というのも、この問いの足下には、ドナーとは誰でもないことがすでに前提化されて存するからである。ここでの前提事項は次のような、〈とても単純な事実〉の制度化された相互行為的な構成過程を確認することで明らかになるだろう(13)。それを、人工呼吸器あるいは生命維持装置を装着された〈かれ〉とはいったいだれなのか、という簡素な問いに表すことができる。

〈かれ〉は生命維持装置を装着している。ここが出立点である。

〈かれ〉は生命維持装置を装着している。むろん〈かれ〉は生きている。「脳死」判定がくだされ、ドナーカードへの記載事項や家族の同意などの手続きが為される。その結果〈かれ〉はドナーとなる。

こうした、あたかも自明な事態として遂行される〈存在論的な転換〉を簡略に確認しておこう。つまり、〈かれ〉が顕在的に《ドナーになるとき》、そこでいったい何が転換したのかを把握しよう。

ドナーである〈かれ〉は臓器提供者である。だが、この時点でもはや〈かれ〉はいない。なぜか。そこにあるのは〈死体〉だからである。むろん、死体はその定義上、生きてはいない。生きていない〈かれ〉はもはや〈かれ〉のままではいられない。とはいえ、〈その死体〉はむろん〈かれの死体〉に他ならない。そこでは、〈死体〉に装着された〈生命維持装置〉がただ稼動しているだけだ。

ところで、〈かれ〉はいったいどこへ行ったのだろうか。〈かれ〉は〈逝った〉にせよ、どこへも行きはしない。〈かれ〉は空間的に移動したのでも、蒸発あるいは霧散したのでもないからである。むろん、〈かれ〉は〈そこ〉に〈居続けている〉。そうであるにも拘わらず、〈かれ〉は〈そこ〉にはもはや居ない。なぜか。むろん、そこに〈在る〉のは〈死体〉だからである。〈かれ〉は〈それ〉へと〈変身〉を遂げたのだから。

かつて私たちは、こうした過程を空間的移動に類比させて社会的カテゴリーの移動と呼んだ〔張江 2000b〕。そして、こうした事態は、社会学にあってはかつてレイベリング論が呈示した、まなざしと権力との問題系を喚起させずにはおかないだろう(14)。というのも、この過程で基本的に問われなければならないのは、こうした社会的カテゴリーの移動を遂行させる、まさに「まなざす側」を議論の俎上にのせること〔佐野 2003: 59〕にあるからである(15)。

このように、生命維持装置につながれたドナーという〈生きられた死体であって、同時に、人工補完の素材〉でもあるカテゴリーをグロテスクなものとして捉えるのか、あるいは、それを科学=医療の進歩として賞賛することで、《そこに生起する諸カテゴリーの存在論的な錯乱》を不問に附すのか、私たちがこの二者択一に直面しているのだとすれば、おそらくは、私たちに与えられている限られた猶予とは、この問い自体を括弧に入れること以外にはないのではないかとおもわれる。そのとき試行されねばならないのは、この二者択一の問いにそのまま応えるのではなく、問いを前にした《生きられた脱構築》という個別具体的な、個々人によって生きられる謂わば〈第3の途〉が考えられなければならないようにおもえる。というのも、存在論的な〈錯乱〉は私たちの日常生活の世界においてすでに多層的かつ構造的に〈そこに在る〉という仕方で、しかも、それらはすでに個々人によって生きられるという仕方で私たちに現前し続けているからである(16)。

おわりに

現在の〈マクルーハン・ルネッサンス〉から受け継ぐべき社会学的遺産は、深く、しかもかなり広範囲にわたる重要な論点群を形成している。それらを端的に標語化すれば、〈近代において暗黙裡に想定されている形而上学的な諸前提との対質〉ということになるのだとおもう。すでに別稿でその論定の方向性を示してあるが、〈身体と人格をめぐる対応説に横たわる形而上学的な前提〉もまたその1つであろう [Harie 2006]。これに加え、本稿で問題の所在を呈示した《歴史的現在》を重層的な諸人工補完群の集積あるいは歴史的な沈殿を含むものとして捉えることも、人工補完の身体化の問題系の把握と徹底的に関連づけて論及されなければならないだろう。

未だ私見の域を出るものではないが、おそらくは〈マクルーハン・ルネッサンス〉が生起し継承された1980年代後半から1990年代以降期にあって、社会学理論の1つの対立軸とされた〈ミクローマクロ(・リンク)〉という問題系の成立もまた、たんなる偶有的な出来事ではないだろう (17)。私たちとしては、そこにおいて問われた諸論点の基底部に存するのは再び〈主体性〉をめぐる問題系であったと考えている。それは、むしろ短絡的に1960年代的な主体性論への回帰を意味しない。そうではなく、たとえ歴史哲学の終焉が一定の信憑性をもって語られたにせよ、それで〈歴史の終焉〉が現実化されるのではないのと同様に、〈主体(性)なき社会学〉の存立もまた、その妥当性の源泉とでもいうべき日常知から穏やかではあるが、しかし確信をもった決定的な不審のまなざしを向けられることによって、自らの不能性を露呈する他にはないからである。

●註

- (1) 本稿は、2006年に開催された「第3回神戸パーソンズ・セミナー：パーソンズとその後 Parsons and After——諸学派との対話」(2006年9月9日・10日／神戸大学)において報告した拙稿「コミュニケーション・メディア・リアリティ——メディア変容の現象学に向けて」を、当日の討議に基づき大幅な加筆・修正を行ったものである。司会者の浜日出夫氏をはじめ会議当日の真摯かつ刺激的な討議に記して謝意を表したい。
- (2) 現代社会論の指標の多数性に関しては、情報社会論との関連から論じたこともあり、やや不十分なものであるが拙稿[張江 2003; 2004b]を参照願いたい。
- (3) 西原和久は社会学を特徴づける主要なパースペクティブとして「①関係性(ないしは共同性)、②日常性、③現代性、④実証性」[西原 1991: 6]の4点を挙げている。私たちとしては、多種多様な社会学的作品群を統合的に把握した場合に構成される〈社会学的世界〉における一定の傾向性を特徴づけるものとして、これら4指標の有用性は大きいと考えている。いずれにせよ、現代性という機軸が、潜在的か顕在的かは別にせよ、〈社会学的作品〉を特徴づける重要な指標であることは確言できるだろう。
- (4) 私たちとしては、註(3)の「現代性」への言及内容からいって、現代社会論が現代社会論として制度化されることそのものに決定的な理論的な自己撞着あるいは自己矛盾が生起していると考えている。この点に関しては別稿を準備したい。
- (5) 現代の日本社会の基本的な諸制度の多くは高度経済成長期に前後する時期に形成され今日に至ったとみて大過ないだろう。不十分なものはあるが、この点を「教育システムと信憑性構造」の観点より描いた拙稿[張江・浜島 2006]を参照願いたい。
- (6) [佐藤 2004]は、ヴェーバー社会学の生成過程における「産業化」の重要性を、知識社会学的な視点から明確に描かれ秀逸である。ぜひ参照を願いたい。
- (7) 私たちには、こうした事態を描写するために用いられてきたさまざまな用語の多様性そのものを問題視する心算はない。というのも、それらの差異は、それぞれの背景あるいは立脚する理論体系との関連という〈党派的

な側面)がないとはいえないが、にもかかわらず、その本義において、そこで問題とされる事態が示す差異性と深部に関連づけられているからである。ここで論点として呈示したのは、こうした側面ではなく、統合的に把握した場合に成立する「3項図式」の存在そのものがもつ現代社会論的な意義の側面である。

- (8) ストーンによって提起される「多重人格」の問題系とは、《単一の身体と対応する単一のパーソナリティ》という暗黙裡に成立する想定が、謂わば近代の形而上学的な設定ではないかという問いに収斂させることができる。この点に関しては、まだ端緒に過ぎないが拙稿[Harie 2007]の参照を願いたい。
- (9) この点に関しては、不十分なものではあるが、社会学における実証主義あるいは実証研究と理論研究との関連から論及した拙稿[張江 2002]の参照を願いたい。
- (10) 意識の志向性と学問領域・科学領域との関連については、不十分なものではあるが拙稿[張江 2004a]の参照を願いたい。
- (11) この点に関しては拙稿[張江 2001; 2003]を参照願いたい。
- (12) 歴史的現在の現象学的分析として[竹田 1997]の参照願いたい。
- (13) A. シュッツは「事実とはすべてはじめから、われわれの精神の諸活動によって全体の文脈から選定されたものなのである。したがって事実とはつねに、解釈された事実である」[Schutz 1962 = 1985: 51]と指摘する。これは〈事実なるもの〉の相互主観的な被構成性を語ったものだが、ここで私たちが描写するのは、それをより具体的な相互行為場面において、しかも、その制度化が十全に為されている場面において〈事実〉として構成される社会的カテゴリーの移行あるいは〈特権的な人間から、それへの凋落過程〉である。
- (14) この点に関しては[佐野 2003]の参照を願いたい。また、社会問題の構築主義にあってはキッセとスペクターの訳書に添えられた副題にある「ラベリング理論をこえて」という表記に端的に現れている学説理解、つまり「レイベリング論から社会構築主義へ」という理論的な移行が、ある種の理論的な止揚のように考えられているように見える。だが、現在の的にいって、はたしてこの指標の妥当性はどこまで認められるのだろうか、こう考えざるをえない。というのも、レイベリング論の軸が「"まなざす側"を議論の俎上にのせること」[佐野 1999: 285]であるとするれば、はたしてこの作業はどこまで達成されたといえるのだろうか。私たちとしては、こうした観点からレイベリング論の再考あるいは再評価の必要性があると考えている。
- (15) 以上の臓器移植におけるドナーの生成にみられる社会的カテゴリーの移行に関しては拙稿[張江 2000]を参照願いたい。
- (16) ここで指摘したいのは、〈脱構築する意志を生きること〉ではない。問われるべきは、より具体的な〈実践過程〉であるだろう。この点に関しては別稿を準備したい。
- (17) 〈マイクロ-マクロ(接合)問題〉に関しては拙稿[張江 1998]の参照を願いたい。なお、そこにおいても論じてあるが、たとえこの問題系が“擬似問題”であるにせよ、にもかかわらず、それが問題として成立する基抵相には、相互主観的な構成過程における理念化の産物ではあるが、少なくとも個々人の意識における〈マイクロ-マクロ図式〉の理念的な構成という問題系はそのまま手つかずに残っていることには十分な留意が必要だろう。私たちとしては、こうした謂わば微細な〈主体〉の構成過程を構造的な被規定態として定位したり、あるいはその存立機制を不問に附したまま呈示される社会理論は、再度、こうした〈主体(性)〉をめぐる問題系に直面せざるを得ないと考えている。

●文献

- 浅野智彦 2007 (近刊) 「自己を社会的にみる」, 張江洋直・大谷栄一編『ソシオロジカル・スタディーズ』世界思想社.
- Baudrillard, J. 1970 *La Societe de Consommation.*, Galimard.=1979, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店.
- Bell, D. 1974 *The Coming of Post-Industrial Society*, Basic Books. =1975、内田忠夫ほか訳『脱工業化社会の到来』上・下、ダイヤモンド社.
- Fromm, E. 1942 *Escape from Freedom*, Rinehart.=1951, 日高六郎訳『自由からの逃走』創元社.
- Giddens, Anthony,
1990 *The Consequences of Modernity*, Polity Press. =1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代はいかなる時代か——モダニティの帰結』而立書房.)
- Giddens, A. 1991 *Modernity and Self-Identity: self and society in the late modern age*, Polity Press. =2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社.
- 浜日出夫 1993 「マクルーハンの銀河系」『情況』1993年7月号、情況出版；67-81.
- 浜日出夫 1996 「マクルーハンとグールド」『メディアと情報化の社会学』岩波書店；97-112.
- 張江洋直 1998 「社会理論と世界の超越」, 西原和久・張江洋直・井出裕久・佐野正彦編『現象学的社会学は何を問うのか』勁草書房；12-42.
- 張江洋直 1999 「経験とメディア」『稚内北星学園短期大学紀要』第12号；17-28.
- 張江洋直 2000 a「リアリティとメディア」, 丸山不二夫編『情報メディア論』八千代出版；127-143.
- 張江洋直 2000 b「死生論と〈世界の超越〉」『情況』2000年8月号、情況出版；201-221.
- 張江洋直 2001 「メディア変容と〈マス・リテラシー〉」『稚内北星学園大学紀要』第1号；1-15.
- 張江洋直 2002 「〈奇妙な棲み分け〉の背後へ」『年報社会科学基礎論研究』第1号 ハーベスト社；8-25.
- 張江洋直 2003 「情報社会論の存立機制」『稚内北星学園大学紀要』第3号；7-19.
- 張江洋直 2004 a「シュッツ科学論の二重性へ」『年報社会科学基礎論研究』第3号 ハーベスト社；148-165.
- 張江洋直 2004 b「情報社会の夢と現実」, 西原和久・宇都宮京子編『クリティークとしての社会学』東信堂；203-228.
- 張江洋直 2006 「コミュニケーション・メディア・リアリティ」：第3回神戸パーソンズ・セミナー「パーソンズとその後 Parsons and After——諸学派との対話」第2セッション (2006年9月9日／神戸大学).
- 張江洋直 2007 (近刊) 「社会秩序が成立する機制」, 『ソシオロジカル・スタディーズ』所収.
- HARIE Hironao
2006 "Body and Self in Information Society:The McLuhan-Renaissance or Prosthetic", The Korean Ethics Education Association :International Conference on "Public Philosophy, Public Ethics and Citizenship Education" ; 3rd Session, 11 November 2006, at Gyeongsang National University in Jinju, in South Korea.
- 張江洋直・浜島幸司
2006 「大衆教育社会と〈自己実現の物語〉」『稚内北星学園大学紀要』第6号；75-93.
- 張江洋直・佐野正彦
1997 「現代社会学と社会学の焦点」, 張江洋直・井出裕久・佐野正彦編『ソシオロジカル・クエスト』

- 白菁社；5-14.
- 小阪修平 2000 『現代社会のゆくえ』彩流社.
- Manhaiem, Karl
1940 *Man and Society: In an Age of Reconstruction*, Routledge & Kegan Paul, London. = 1962, 福武直訳『変革期における人間と社会』みすず書房.
- McLuhan, Marshall,
1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, Tronto University of Tronto Press.(= 1986, 森常治訳『グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』みすず書房.
- McLuhan M. 1964 *Understanding Media*, McGraw-Hill. = 1987, 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論』みすず書房.
- McQuail D. 1975 *Communication*, Longman Group Limited. = 1979, 武市英雄ほか訳『コミュニケーションの社会学』川島書店.
- 佐野正彦 2003 『逸脱論と“常識”』いなほ書房.
- 佐藤嘉一 2004 「社会変動とヴェーバー社会学の誕生」『年報社会科学基礎論』第4号 ハーベスト社：27-45.
- 水越 伸 1993 「メディア論の混沌」『情況』1993年7月号、情況出版；57-66.
- 村上陽一郎 1999 「日本社会と情報化」『情報の空間学』NTT出版；188-215.
- 大谷栄一 2007 (近刊) 「『現代社会』はどのような社会か?」, 『ソシオロジカル・スタディーズ』所収.
- M. Poster, 1990, *The Mode of Information*, Cambridge Polity Press. = 1991, 室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』岩波書店.
- Rieseman, D. 1950 *The Lonely Crown: A Study the Changing American Character*, Yale University Press, New Haven. = 1964, 加藤秀俊訳『孤独な群集』みすず書房.
- Schannon, C.E. & Weaver,W.,
1964, *The Mathematical Theory of Communication*, Univ. of Illinois Press. = 1969, 長谷川淳・井上光洋訳『コミュニケーションの数学的理論』明治図書.
- Schutz, A. 1962 *Collected Papers I*, Nijhoff. = 1983 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集』第1巻、マルジュ社：1985 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集』第2巻、マルジュ社.
- Spector, M.B. & J. Kitsuse
1977 *Constructing social problems*, Cummings Publishing. = 1990, 中河伸俊・鮎川潤・森俊太・村上直之訳『社会問題の構築』マルジュ社.
- Stone, A. R. 1995 *The War of Desire and Technology at the Close of the Mechanical Age*, The MIT Press. = 1999, 半田智久・加藤久枝訳『電子メディア時代の多重人格』新曜社.
- 鎮目恭夫 1983 『ウィーナー』岩波書店.
- 竹田純郎 1997 「歴史的現在」『現象学年報』第12号；45-68.
- 竹内郁郎 1973 「社会的コミュニケーションの構造」, 内川芳美・岡部慶三・竹内郁郎・辻村明編『現代の社会とコミュニケーション 1 基礎理論』東大出版会；8-32.
- 竹内郁郎 1977 「社会的コミュニケーションとは何か」山根常男ほか編『テキストブック社会学6 マス・コミュニケーション』有斐閣；28-55.
- 田崎篤朗・船津衛
1997 『情報社会論の展開』北樹出版.

- 若林幹夫 1993 「メディアと社会変容」『情況』1993年7月号、情況出版；46-56.
- Weber, M. 1922 "Sziologische Grundbegriffe" in *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen, J.C.B. Mohr. = 1972、清水幾太郎訳『社会学の根本問題』岩波文庫.
- Webster, F. 1995 *Theories of The Information Society*, Routledge. = 2001、田畑暁生訳『「情報社会」を読む』青土社.
- Wiener, N. 1954, *The Human Use of Human Beings*, 2nd. ed., Houghton Mifflin. = 1979、鎮目恭夫・池原止戈夫『人間機械論』みすず書房.

● 英文タイトル

Genesis of The Scholars of Media Theory and a Perspective of Prosthetic
— for Phenomenology of Social-Media-Change —

● 英文要約

The main purpose of this paper is to answer a thematic question whether there might be "The McLuhan-Renaissance" in the mid 1980's. In 1960-1970's, as already known, the theory of communication was led by studies of mass communication and the term media was used as representative unit of mass media. This affected the general understanding of McLuhan in 1960's and made him "a dead dog" in 1970's. The fact that the basic unit of communication theory before "The McLuhan-Renaissance" is "voluntary act" is clearly exemplified in most influential mathematical framework "the Schannon model" and main criticism against this stance is concentrats on its assumption that media is path.

Thus in this paper, firstly, I attempt to summarize the theoretical frameworks of theoretical literature before "The McLuhan-Renaissance" such as communication theory and theory of information society. Secondly, based on the examination of the core problems raised in the process of theory formation in media theory, I try to locate the theoretical resources that could be adopted today from "The McLuhan-Renaissance". And finally, I try to elucidate that there is a serious confusion in the metaphysical premise in the conception of self and body in the contemporary society. What we should learn from A.R.Stone is the dynamic understanding of media in its relation to human environment in McLuhan theory.

● key word

media theory
theories on modern society
communication
Schannon model
cybernetics
prosthetic
technical detereminism
ontology
McLuhan, M.
Stone, A. R.